

昔のお山参詣の話コ (標準語)



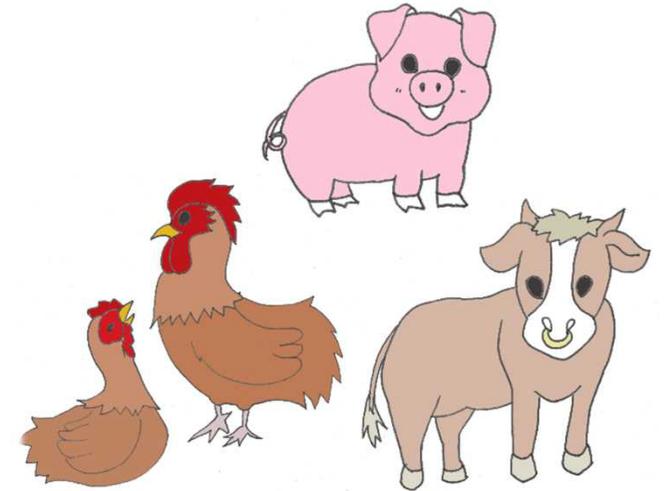
国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト： やざわ ゆな
カラーリング：みやかわ みなみ

さあ、子供達。
では、今日はみんなに、昔のお山参詣のお話をしようかな。



津軽の秋のお祭りは、はじめに岩木山神社、次に猿賀神社、そして小栗山神社の順番で開かれる。

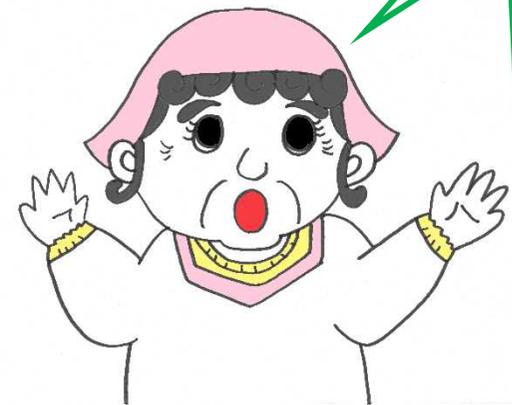
岩木山へお山参詣へ行く人は、3日、7日、21日間、四足、二足を食わずに精進潔斎※（しょうじんけっさい）をしていた。
四足、二足というのは、獣や鳥のことだよ。



それから水垢離（みずごり）をして体を清めた。
水垢離というのは、清らかな川の水や、井戸水をかぶり、身も心も清らかにすること。

昔は、水垢離に行く時や、帰りは、笛や太鼓でお囃子をして、みんなで並んで♪サーイギサーイギ と唱えていた。
この声が、遠くの村や近くの村から、秋の夜空に響いて聞こえてくると、お祭りが始まるとワクワクしてきたそうだ。

※精進潔斎とは、肉食を断ち、行いをつつしんで身を清めること



お山に奉納するために、五色の旗や、太い筆で書いた
幟旗（のぼりばた）を作る。それから、檜葉（ひば）の
木を鉋（かんな）で長く削ったものを、竹竿の先へゆわ
えた御幣（ごへい）も作る。

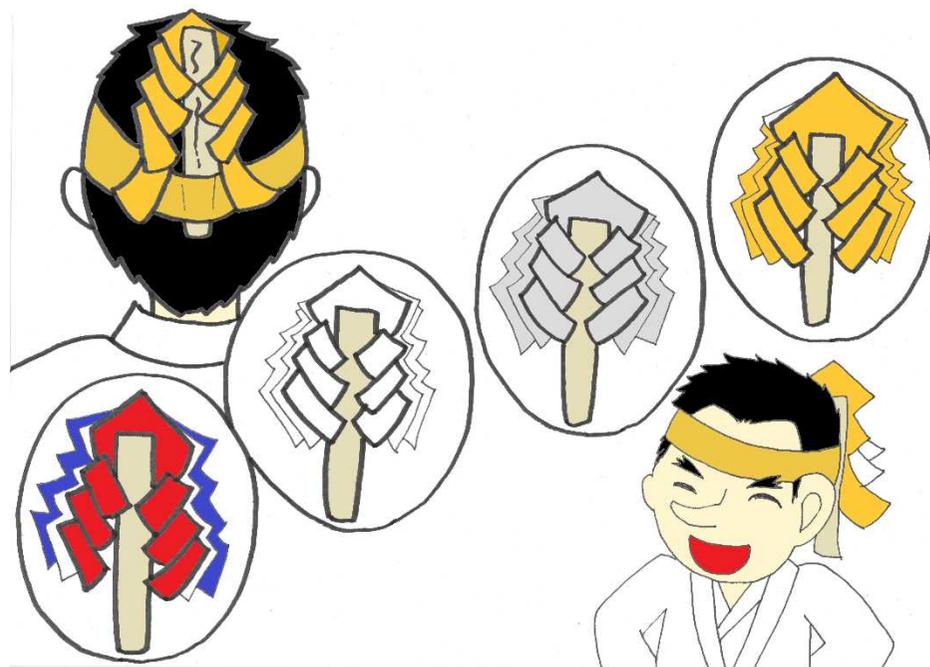


女の人達は、参詣へ行く人たちが着る着物や、小物を支度する
のに、大忙し



お山参詣には、伝統的な掟があって、
初めてお参りする人は、赤・白・青の御幣
二回目の方は、白い紙の御幣
三回目の方は、銀色の紙の御幣
四回目の方は、金色の紙で作った小さな御幣
を後ろ襟へ横向きに差し込む。

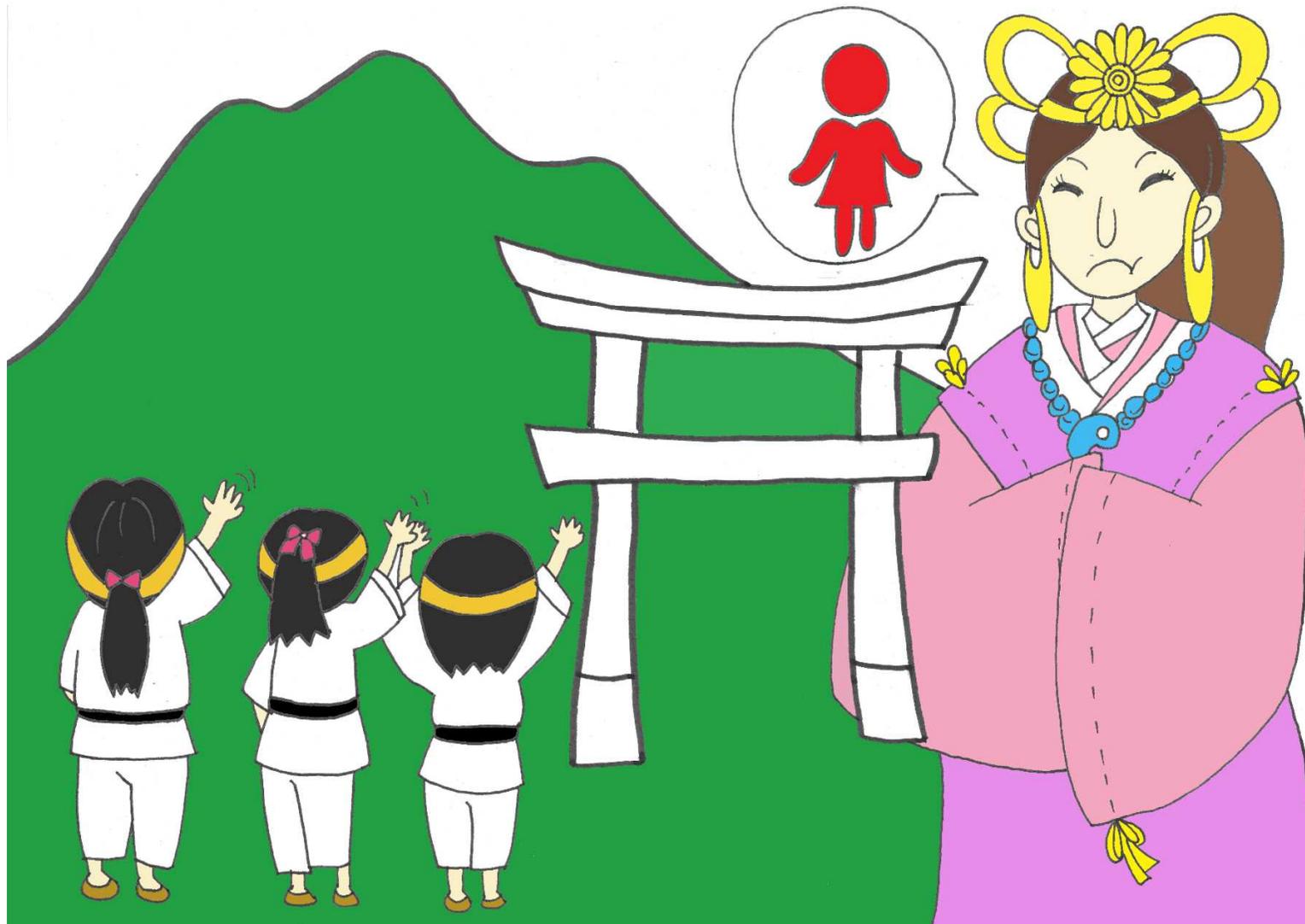
金色の紙の御幣の人は、少し鼻が高いそうだ。



小さい御幣を持った人が先に並ぶ。若者や、
大人達は、大きい竹竿の御幣を、腹巻きに
挟んで、両手で支える。御幣を持った人た
ちが一行に並ぶ。

大きい旗は、力自慢の若者が持つ。
それはそれは重くて、風が吹くと倒れそう
になるので、旗持ちの傍には、力糸を持っ
た人が両脇に並ぶ。

そして、後ろには、下詣りする女の人たちが並ぶ。
下詣りというのは、お山の頂上まで行かずに、ふもとの岩木山神社までのお詣りのこと。
岩木山は、女の神様だそうで、女の人があると、ヤキモチをやいて、怒ってしまうので、昔は女の人には頂上まで行くことが出来なかった。
今は、女の人でも普通に登る。
それでも、神様が怒ったという話しは聞かないよ。



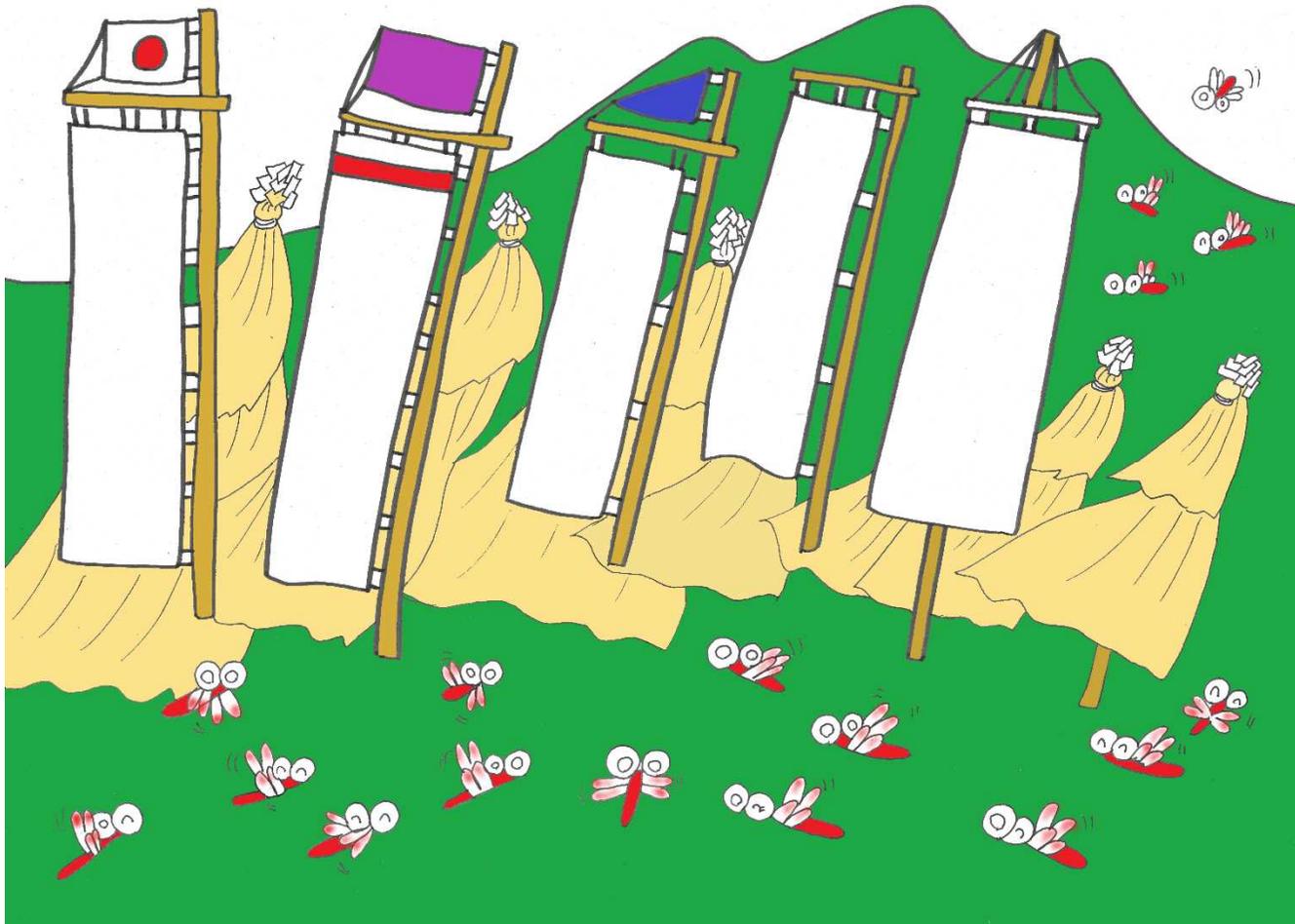
♪懺悔（さいぎ）懺悔（さいぎ） 六根懺悔（どっっこいさいぎ）お山八大（おやまさはずだい）

金剛童着（こんごうどうぎ）一々礼拝（いちになのはい）南無帰命頂来（なのきんみょうじょうらい）

と、何度も何度も、この呪文を唱える。

前と後ろで、一節ずつ交互に唱えながら進んで行く。

こうして、あちこちの村から、お山参詣の行列は、秋の澄み切った空の下、トンボがたくさん飛んでいるのを見ながら、稲穂が揺れる中を、神社を目指してゆっくりと進む。



百沢の岩木山神社の前には、たくさんの店が並んで、夜中中（よなかじゅう）賑やかだった。

神社の裏の森の中では、若者と娘たちのロマンスもあったりして。若者たちには、それも祭りの楽しみの中の一つだった。

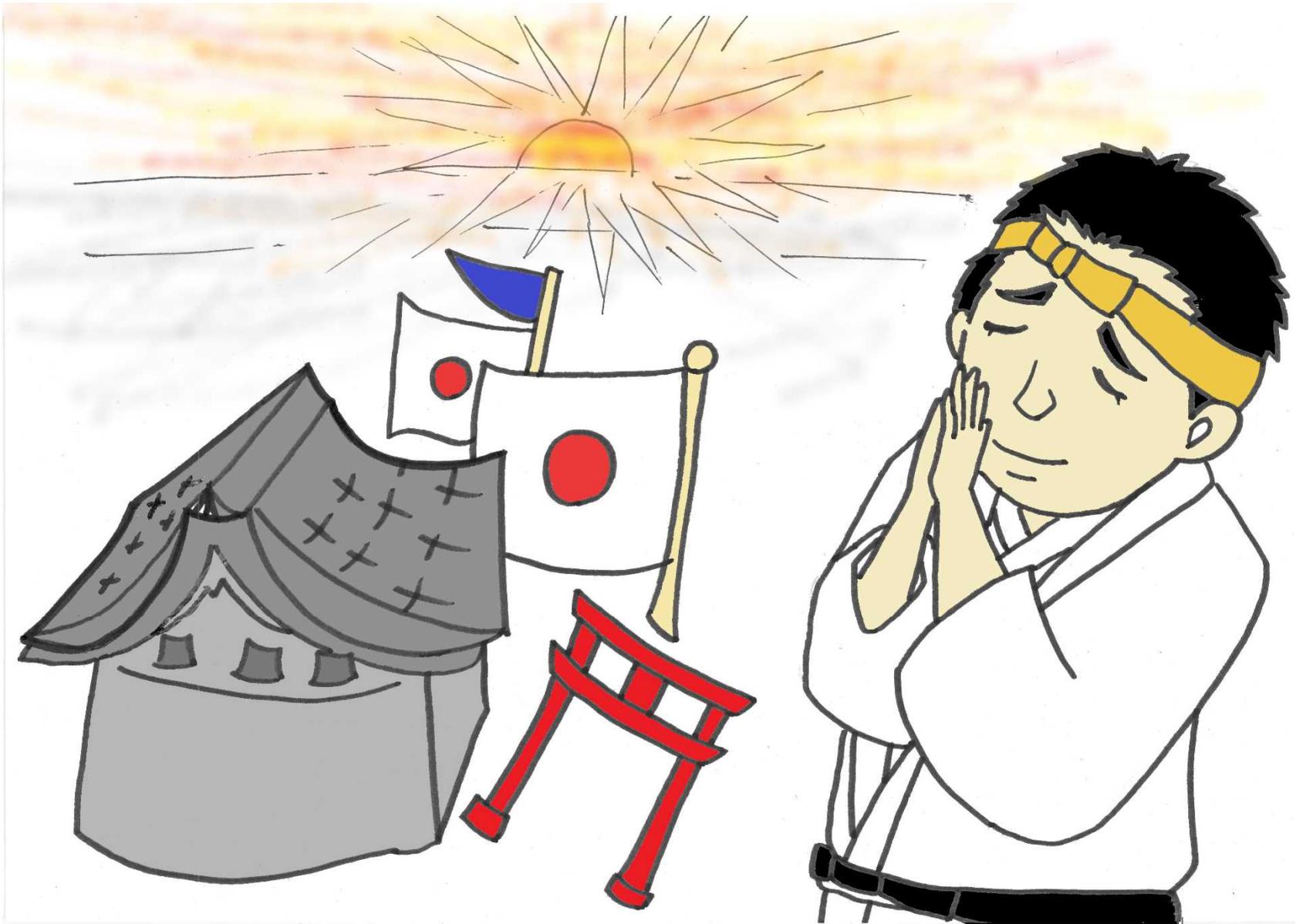
夜中のうちに、麓の岩木山神社から、山頂の奥宮まで登る参詣人たちは、松明（たいまつ）を照らして登る。

その松明の火は、三里も離れた弘前の城下町から見ると、長い虫のように見えるそうだ。



奥宮にお詣りして、東の空を金色に染めて昇ってくるご来光を拝んで、山を下ってくる。

膝がガクガクするので、このことを『膝で踊る』とか『膝が笑う』などと言ったものだ。



帰りには

『ええ山かげだ、ア、バダラバダラバダラヨ』

『朔日山かげだじゃ、ア、バダラバダラバダラヨ』

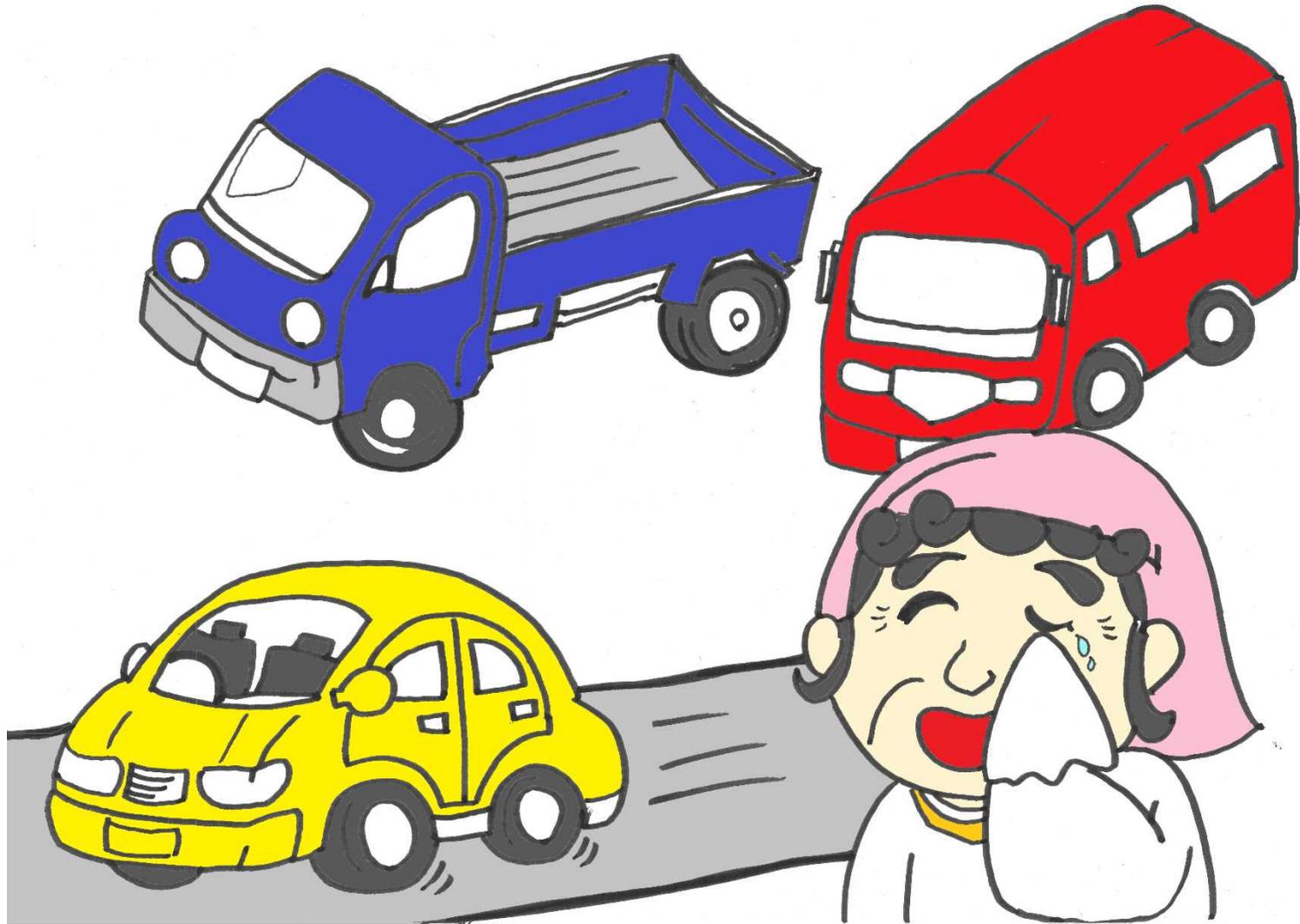
と囃子をしながら、右手にははい松の枝を持って、お多福やひよっこ、狐、天狗のお面をつけて、仮装をする。

踊り手を中心にして踊りながら、それぞれの村へ戻って行ったものだ。



今は、自動車などが出来て便利になって、道具はトラックに積んで、人はバスで移動する。

あ～あ、昔のようなお山参詣は、二度と戻ってはこないんだろうなあ。



つい最近まで行われていた、お山参詣のお話だよ。